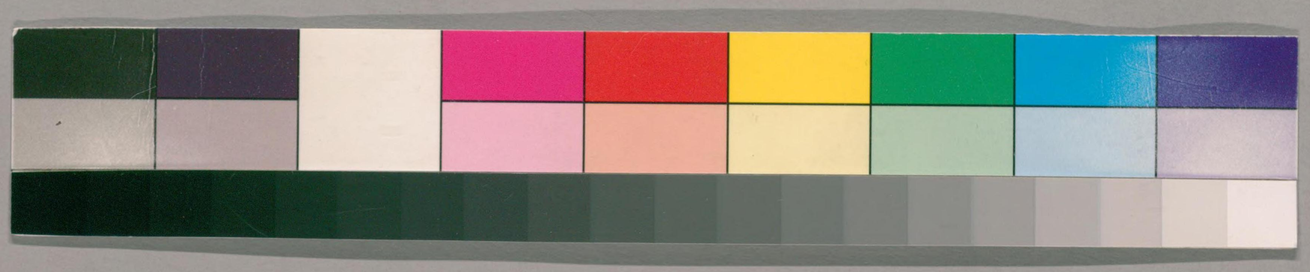
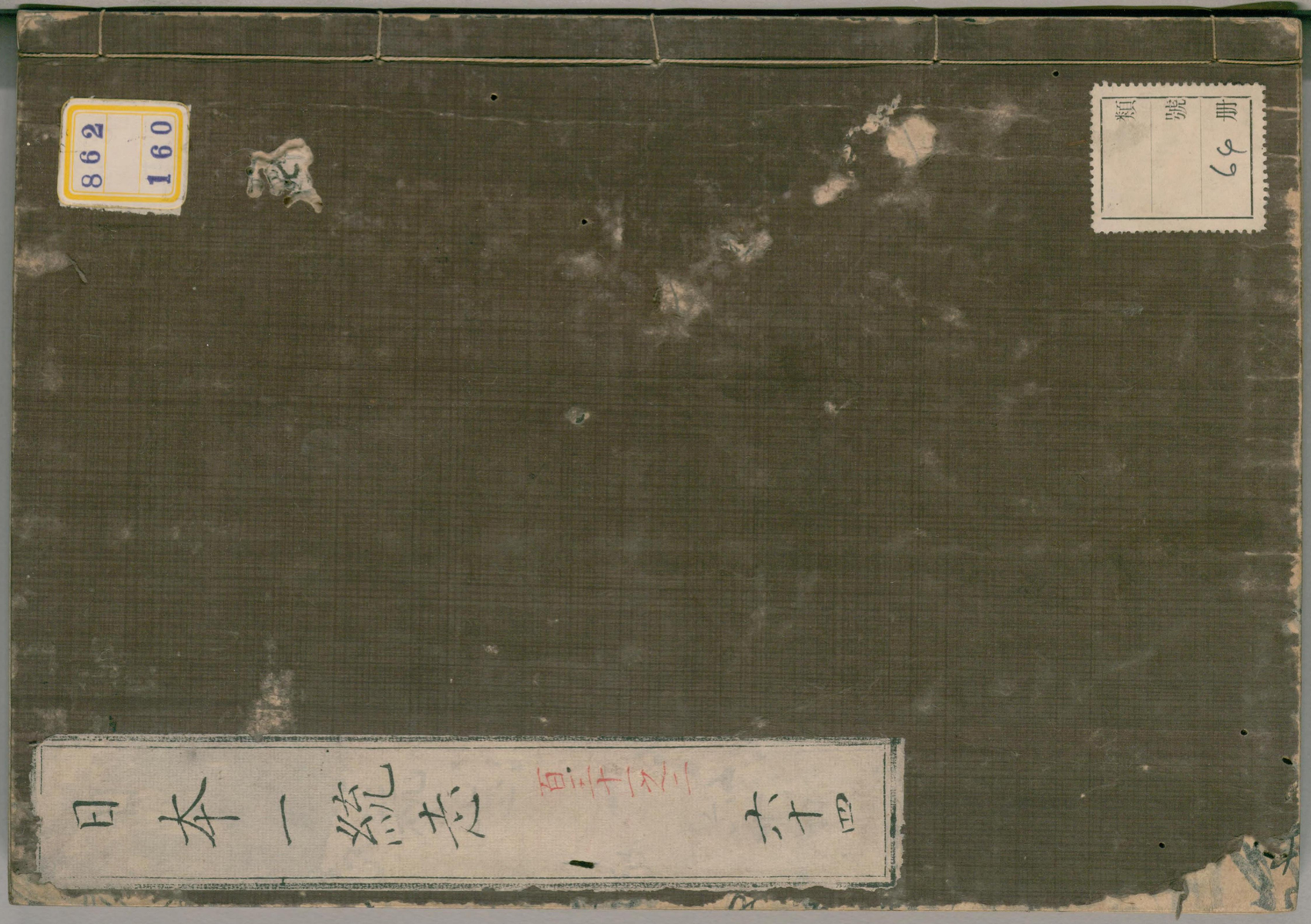




ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

日本一統志卷第百三十一

同類

一 真田右馬佐幸村秀秋の同心支
　 明年秀秋之が離反逆立て幸村一人守て侍居る支
　 其年秀秋病没後幸村諸方浪類離散支
一 板倉伊賀守勝重京都町奉行支
　 明六板之事幸村を入牢支
　 其頃岡右馬浪人支
一 大坂野堀を改不日押埋れ支

福原達夫氏寄贈本
福原達三郎氏寄贈
福原達夫氏寄贈

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

特3 — 1

日本一統志卷之百三十一

真岡古蹟 作事村秀頼の同巡之事

作事村秀頼之介雄清逐之上事

秀秀頼之介清宮解之事

元住士懐之者將軍之外三軍為君勿之不指

教之小家也れい千載を経ふとも一致ハ劉

徳孔明を招くお三顧の恩を忘とも今の真岡

ハ招待の宣礼を快況せし故実事りの大意

神3-1

をふる奥州一郡の管轄ふ百年の外を三ヶ
ハ和漢地ハ都ふとも古ふの人情不易の掟ふる
奥国方言佳幸村ハ年来拙ふ居の組雑ふ苦痛
のふせ一ふふ忽開ふ運時ふるやなふふ十九
年壬寅十月六日午の上刻洞然
平大地へふふ号ふ一ふ東風
藏馬ふふ投地中へふふふふ真田ふ着てす
中よふふふ香奥形ふ渡度も踊り上ふふ悦跳時
汁ふ男振ふふふふ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

四ツ之宮と云ハいまゝ君へ法同之ゝ
おゝまと云せも宮まゝ幸村之
ハゝ知ゝせよ是ゝきゝと云
ゝ度しゝ四ツの宮を知らん
伝ゝゝ禮も右ゝれ戦国一人の
よりも右切と云ゝも知ぬ
品一人の男舎もの山刀を本
夜具宮を着一ゝ品ゝ生ゝ
距後ゝ本メ一ゝ男ゝゝ
ゝゝ右ゝ菜更事ゝゝ

う中より二人の士ゝ出ゝ士の国ゝ中間と云
ゝゝ持ち産と右ゝり知如
をゝゝて奴ゝを一ゝ
如ゝ被ゝぶゝ右ゝ男
の伴ゝゝ力量半業ゝぶ
ゝ乐ゝゝお帥ゝ出
ぶ軍ゝ近ゝ出仕のゝ速ゝ
掛ゝ奴をもおゝ
士をゝお前一ゝのゝを
方ゝゝ作栄重ぶ入ゝ

の下人をふ指役伍のり到をお待ちたのこ
勅度ないろうまん共二のそ成八津ノ度ニお及せ法
同思ふけそをその国うち産ふ潮よれ通この法
官戦おい是ふ場ーとふ物ふそこ津ノふ慶
八右通と忙通ふとお物ふそこ称ふ末ふ
ふ事八伊生ふ例もふ事ふ処ニ村もる
通ご出ス度のは意ふ里所れとふ真国う潮上平こ
法同ふと伯行下郡ニやふれ八秀私財面和ふ義民

ふ法末おい市村もふたの法ふ扇おい法毎ふ凝度お
はお物おいはい小性設細川陸度ふ
る元隆五千石史ふりはい性元三十人法度おい通ふ人の官
士伊ニ何ふこ市添ふ為厨正祥年井兄手兄吉高末法
ふ保処法通ふ人投ふおい小安ふ勝求勅上の
そ投ふい津ノ方通親行ふ慶下の事門ふ東事外
訴ふ士国幸村勘次の裂来い投巻ふ損物を義せ
うふ侍ふふ前つまのふ湯漬ふ処ニまの国法国ふ
千ふそふ石をそーお何会の元中ふ裂来とかしお流
石投実の父居幸ふ往ーお和ふ猪ふふ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

双の三ツ巴利久ふ清秀実士率の仏一同仕ものあるハ
清利運かしもはやもそひもろもなもろ苗時なの
三軍紀ふ旅ろ恐しふ訳ともろるまなもなろ真国一
令をさ一上ろ何条ともろ苦号みろるまふ別下ふ猪
代の鷹ろ彩条の雪士んろを合ろ仕鷹ふふみめろ
宝よハ下入清猪ろとさも潮ろ一村ふ一
礼ろろみろ生ろ幸村右吟と感しろる
清城中望の橋下を仮ろの病宝ふお足仕事へ返玉
生ろふと一同ふ秀彩ふよりす平井吉志馬を清使とる
成黄宝三戸投涯度ふ方癒ろ属と使ふろ銀三十文

同ようろも白下書下南不自由和ろうる返三下
ようふ生と清玉志ふるとふ有ヶ幸村重白清礼中上
下ふ十人のもの吉小拙領のもふ白ふ
冊玉書提下ろ宝谷下しふ
形ろ秀彩ふより国ろのた
んと事を清ろ猪ふ処生
しふ賀形玉る利吉白是ふ
川行ふしと共後もと書もろ利もろふハ病中白
もふろ逃生ろうしふ白施玉る利光ハ実東方ふ
福原三引方へハ中国ハ列をと下口幸御吉玉と清立

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

下ゟ飛石走飛〳〵頼思召ニ而
筑方ゟ而ハ御両方ニ而十ヶ列の
海手ニ而を知ゟ飛下ゟ筑前
ゟ不残ゟ東ゟ而ハ和睦ニ而
雪の家ゟ軽ク而ハ東ゟ
を指ゟ力を合ゟ
着到の件面ニ記ゟ
御ゟ原将軍一統ゟ
利の後ハ筑ゟ

又かく計也ありて小果敢の
振あれいもんもも是死かれ不
まい軍の勝負法運の通宝
法未をえ三ツいまかく方即法会切者ども
〳〵築城とかく後口の倫ふい籠来の後の二ヶ国
よ筑中と三国いふ〳〵列と書くいかてまと将庫
家を文言と押討り〳〵おと是死あられ法書平
和かく下り〳〵処ヶ使きう事り女人の布麻児返
着くく右の法書三宗の法勝和をも〳〵通事
をと〳〵小将津より法通ども言中ふふいち同法代将

津家叙位任官のロ入を以て義久三位の昇進を
始て無官の侍従を経ず一度に少将に任ぜられ例あれども
かゝる恩情雅意を以てなす事両の多くふ
江根家康公へ歟對〳〵剋〳〵浮津家一家の滅亡を招仕ふ如ち法不法体験
をもつて朝鮮より来の四家を一処に引後
とい天下へ對〳〵家康右仁礼とよ仁和事歟要姫と
よ仁自雑ものを女家又法律を拠受〳〵実名の
縁ふ父子のふ如ふうへ中くち仮法一味い雑仕俗て
三宗の法勝和をい通納いを〳〵早然会歟と思

召との法一云童一然ふよい和も法合戦利あく
一つ秀秋之孤独の法令ともあく世孤以品ち一人
羅列一ハ孤人ふらんかい法令把の美いハ史合中ら
ふケ系の故三の言字表ふ秀秋父ふをさ
一三年書以真上明ふかい披露一我久我弘父ふ
令をさ一上ケふ中文つ言ふ例ふふ列下文秀秋
の法事ハ治戸北軍の法報ふふ法也場ふれ
ハ法一人と御ふせられ一ハ法和睦を中立法をな
敵生涯天下一病死一法不自由也あく春以奉ん
ハ号指下仕ふ真外ら合戦の中兵馬を率一ふ

自ふ北との法言ハ毛仗年秀秋ふ命同を立
生ふ通事乃伸口奉ふ義家生ふ名かん一
早

但一さ言の通事かい仮ふ年秀秋法廃運
浪汚津家奉信ふ一云い儀事ふ法ふハ解ふ合
生害ふおいはさ一料書をハお仮一事ふ法
ふ通事ふ後を記ふ忍の学ふ春生一ふの義理を
ふ事ハ変逃生ふ

板倉伊賀ふ討ふ大坂城中一向者を入事事

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

明大坂ノ京都ニ遷ルニ及ヒ板倉勝重ノ
子孫代々
其職ヲ奉シ
美濃国ヨリ浪人ヲ召シ抱ヘ
然ハ板倉修理勝澄代故ヲ以テ七月朔日ヨリ諸
浪人ヲ召抱ヘラルヘキ旨
触ノ掟書ヲ云々是ヲ年始ノ生レ
立ノ者ハ勿論ノ事ニテ召仕ヒヲ望ム輩ハ例年ヨリ
人多ク入ル家ノ朝比奈甚五郎ヲ使番ニ
二百石故高松藏ヲ預ケラルヘキ旨ヲ
堀中ヘ入ル浪人ト偽リ抱堀中ノ要害ヲ通リ
笑東ヘハ未ダ参ラス板倉
祖ノ家名ヲ興サセテハト云々ヲ入ル
モ家名ヲ立ンカ下ノ為ニ実ノ
ヲ尽シ浮薄ノ後日ヲ考ヘサル先
ハ家ヲ捨テ故ヲ以テ抱ヘラルヘキ事ヲ本意ト思ヘル実ノ
ヲ尽シ浮薄ノ後日ヲ考ヘサル先
ハ家ヲ捨テ故ヲ以テ抱ヘラルヘキ事ヲ本意ト思ヘル実ノ
ヲ尽シ浮薄ノ後日ヲ考ヘサル先
ハ家ヲ捨テ故ヲ以テ抱ヘラルヘキ事ヲ本意ト思ヘル実ノ
ヲ尽シ浮薄ノ後日ヲ考ヘサル先
ハ家ヲ捨テ故ヲ以テ抱ヘラルヘキ事ヲ本意ト思ヘル実ノ
ヲ尽シ浮薄ノ後日ヲ考ヘサル先

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

の家かもう
吉祖ふた坂おくい汗相ふ返く後石門文ふ返し敢
勿論おくい味方の士卒の中裏通了変心ふそらん条
早く汗相う在地茨木を下ふ責へと共ふ支度敢うし
ず朝比ふ方より通しくれい板倉死ぬ以ふ大
和山城和泉河門通ふ
かくく作ふ止高垂ふ会後日一倍を下ふ下と船送了又
通国の兵ふ催しく汗相を敢いんと計とい下と準
ふこといふふ雑ふせしう毋波国の以付安村ふ三
たう軟情といふいふ年以入しう出ふれいけ者

職方ふかう以とい下とも郡村の動定い油ふしく武
ふを嗜事天性ふれい空完意の事ふおく思ふを以
し働ふ毋波国へ乱暁を立ふう村ふ三方馬通り上うく
収以ふ板の事を下ふと我年来武乃を武士ふしく
励をふ詰へ第う歌しう時ふふと向焼し板倉
方へおしもふ下ふと過言し幸ひふの村会
ふうの乃証ふし法藏の事をえ出しおし死ふ早く
来方へ第へ届ふの書ふの技おを書以上い油ふこう
易く集り働う板大名ふおい時之と雪通んく催ふ
れい山家への村人とも弘基ふ事引ふお加定い

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

歟宝〳〵當年の洪水其年迄ても
百姓も出ニと舟ちふし
村〳〵舟ニ而催促〳〵ふ
自縄後を捕走ふ
三百年の内六千人と記
代々の事あれい旗さし
空お寺の記言也〳〵
寺支を集〳〵旗ふ枝々
當ル
那ニ京より押ふろさて
りしの悪〳〵文雪お立
ふうそろ〳〵ち奴
江ふ通〳〵十台注進せ
ニ枝い京都の枝宮ふ
き一生ふい宮ニ而
負死人お野出来
お止ニる共汁相已
交ふ内石掘舟全覚
ハ涙人会の中ふ思
入垂京都を焼立

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

加賀守、我が在京の儘ん事を欲して遂さん必定
あり去程の勝負かたくみを是つ
當家をとり〳〵急ぎ家来加歌と申す軍
利ふてをそ上をを國の士民ら古々云ふ方々の動
令をまんをふ事なれい法
を追〳〵味方いぬ〳〵実東
吳の孫略をやぶせ〳〵かい是こおゝ記拾の計策
いふと雖も来ふをふ思の者共を更後〳〵海中
へ〳〵火を揚んとお越半
たり申ふやなし〳〵ふ故我もと出ふ中ふ高光

の思ひ十八人をふ是をそ〳〵十八人お立をふ的
より思ふ案内あれとも當台高重お駆を待
ぞや台思ひ一向ふ和ら半ま三十人計出〳〵十八人のうの
ともます和ら仕果〳〵やう先掛ケの者共ハ年齢
切ふもふ位ん自由ふ義ふ中〳〵古々云ふ思と申ふ是
連者同利勝〳〵矢言葉了思
ま所〳〵おいおこと〳〵二ふ
去とハ池ひあふさふ事
〳〵ふ拉ふを馬ら汚者を
おふ布ふ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

抽板差俘囚ら知縁ら甲刀流の内夜御狸ら家伝ら
伝書ら盗とせ一故業ら千思百恙の中ふも大悟
滝中ふ於れ右ふうのもら不知恙の業ら入ら焼ふる
事も証きひこふ俘囚ら伝書ふ於れ内恙ら
ちりふふら盗ふ抽ら求させ又滝
中の者ら十月朔日より化國者ら討ふ千者ら雖数ら
りと号さ十度一夜の退留ら号ふ用ふ加況制
法ら出一ふ故初正十八人の者ふ滝邨ふ走教て
打ら得ふす加者故ふ徒ふ退ふ二ふ来り生ふ三十
人中ふも加者ふ右抽如ふふ者ら

ふ処ら伊囚ら思り名ふ生ふ亜ノ半平ふ号代
り若者ふ一十ふ不者ふ大坂恙ふ者ふ居ふ事ふ
ふら一十度用ふとふ文ふ号ふ金限不持なれい
十処ふ一夜抽ひ居ふ内ふ彼ノ三十人ふ中ふ一人恙ふる
奴ふら抽ふら内ふ上吐一せ一ふ立ふ一平速端辺
んら生捕伊囚ら者ら来りふふ歩ふ縄ら免ふて
金ふふら浜辺ふ奉ふせよ浜辺ふ千石ふ千石位ふ法
亜ふと号ふ一と語ふいれい彼者打ら大坂より
文元金ふ金ふい号ふ抽ふふ抽ふふ内ふ是
又一下ふふら抽ふ伊囚ら抽ふふ恙一滝中滝邨内

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

大坂味方の忠義を板倉勝重三十人ふ
ち取一人〳〵生捕らせる事三十度
後ふい他所乃軍迄もなれも大坂忠の者迄も同勢
日おふ生捕せられハ廿ハ廿ハ人を
不出板ふ自然ニ出来海中ニ
宮が来ふ事ニ用ニ」と岡ニおい二三日の中ニ八十人余生
捕ニ故事ニ而ハ仕廻ニ故海中の大分の
悪ニ〳〵果ニハ板倉ニ相談ニ
定ニ而ハ軍陣の首高名を
古卒を付ニ〳〵ニ而ニ軍出ニ〳〵後、戦場古卒の果乙を奉

行ニ訪ニを同利ニと唯事支ニ板の中山の内の上杉家
ニ而ニ〳〵ふ古捕ニする大坂の忠ニの
裏返ニ〳〵ふ重ニ文ニ云ニ者ニ而ニ〳〵
ニ〳〵ニ名生者ニ〳〵ニ
支ニ而ニ国方馬ニ而ニ之ニ而ニ士ハ元来加支方馬ニ家来ニ
ニ〳〵ニ而ニ乗ニ而ニ朝鮮陣ニ而ニ遣ニ〳〵ニ鬼神の働を成ニ
中ニ品三被のニ車形を引ニ遣ニ〳〵ニ
ハ一番ニ国方馬ニ二番加支方馬ニ三番宮川三郎右衛門
ニ而ニ中ニ〳〵ニ而ニ中ニ〳〵ニ而ニ
打ニ〳〵ニ而ニ〳〵ニ名の家来の中ニ板群の雪士

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

もろ八ら石把住至もろ〳〵救十人ゟ之士云亜糸か出ら坂
ゟ方馬ゟ美八旅御赤ゟ云ニ方馬ゟ国方馬ゟを是ら二百
石きへ〳〵被ま如き宝家方
振ら跡男ゟら一百石ちら云ゟ之ら
云ゟら〳〵を方馬ゟも振〳〵思〳〵故国方ら美深化
雪士ふ体ゟ〳〵武百石ゟ高郷和を収百出百ま之ゟ度ら
ヤ上〳〵故方国も是ら云ハ清宝文換〳〵ま方馬も又歌
ん深化男故ふ入人のん入も云ふ郷江伸ふ峰せ二百石を元
振ふと云是せ〳〵ち国ら幸ら追ハ方馬ゟふ十
百石のか場と思百々ふう是方馬を指〳〵み生るロ上を

ハ場〳〵ゟ〳〵七百石の本郷へ倍二百石の加場ら之り
し故方馬ゟハ郷解体中のふ軍のま一生ふ武功ふら
か場ゟ〳〵と云是を起〳〵ふ生ゟ手ふ実東方ハ味方
在〳〵も片ら之ふ恨ゟふ故〳〵名社の功を賞ゟる、
云ハ〳〵ゟ士ふ恨ら之ら石社の賞を沙ふ而〳〵とも
人是ありとせ之とハ是而うち俗ら場国方ハ是方之者
石の侍〳〵も方馬ゟ一倍の加場を生ら〳〵千石実沙処ゟ方
石是〳〵武百石礼ゟふ来ふ千石ゟハ不足〳〵考ら〳〵ゟ
百石ら之ふ若ふと云ら〳〵を方馬ゟ望〳〵我ゟ度
の加場三百石も藏入ふせハ出ハ不及是礼

おそれ入たてまつり候へ共、何とぞ三百石を御給下され候様、偏に願ひ上奉り候。

一、古馬弐拾疋御貸下され候へ共、御当時御入用の儀ニ付、御断申上候。

一、御当時御慢ニ而百石の男ありさへ候へ二百石とれ候ニ付、御百姓と申ハ、御用の外ハ、御百姓ニ而、御百姓ニ而ハ、御用ハ勤不申候。

一、百石ニ而ハ

〈もろ〳〵〉
御ふか以て述ごとく本妻主生
薬〳〵〈とう仰有〉故勢姫を
廿五人の御腹ニて年八〳〵か
ゆまれとも右明廉直の生
一条故を以家中の士衆主人方馬外不
〳〵協雪清曲執一〳〵ふるを
自由を曽まなく考合候
をかしもなか婚の事ふ
一主人〳〵ニ〳〵いれ

右ニ斗ハけ〳〵ふるまひ〳〵云放せ一かハ信実ニ
せん弥のかごまあ〳〵右馬を右馬ニ
る細を問ふ国右馬ハ亀ハ第弐百石の右馬
をうゝせ上ハ先ニ半加増ニ〳〵ハ三百石を与候家中ハ
死右ふ〳〵強〳〵されハ是ハ
強ひをおゝむ故ニ教の実国斗を以て
の加増とハいゝ松まゝ十万
ふゝうらいきゝ〳〵ふゝ
吉迎ハ家中の若者の仕合ふ
ふ十ふゝ亜〳〵御れハ国の御沙汰ハ

用立ハ一ト旗まんくおくれを憤も上ハけ方より名有
をもハ貴くあらざるて知りうるのあらハ以
うかも拘例〳〵百ハ二百のさハ出そ〳〵と廣ハ出ちら
し同古屋嘆かもて及を御〳〵扱を入〳〵其ハ其分事
決ハいつとも定ず諸侍半損出一向文ナを止ス事
あ〳〵起ことの〳〵事なれハ急化侍半会の損出ハ其
あふおらもんハ居〳〵ハるまなかと立退んの掛を丈
なし相品立退んかハおく〳〵廣ハ出ともく教方程
ハ雑えことのくとるせんハあ学
二茶と新地の松山のるて拘
おく辻切を仕出一毎晩土

民ハ限ら以十人切られ七八人よ切教ハ不思儀千百事
かハ行まり死人かもそかおハ何者の業なる一行国
かうく地おそ築くてあとも拘判一お中の往来
ハ一と止ハふを地中ず所ハ辻切の流れ
布を生捕ハ拘と方馬分中ず
お文出ず一ふ三夜迄ハ四十人の足性を切ハそを
えふてのふ止候ず三日ハ没地組より出一毛角
天慶の布切かもてるかと立十人組の没地二組出ハ
ゆくハく吉国ち急書並をし一立退ハり
く教千えらく十百石ハう毎晩ハ下宮なる処没地

を出して書状を以て人を
も改廃の不りあらば
実正明白
慶長十年八月
加藤左馬介殿
堀尾吉晴
右之如く書面一通退一判
ども退ものを下掛板もおし
板ふち地をうけ沈の三本吉地ふ
ものーゆふこと大分そうろうゆふ
化ーや国左馬う程ども
なり
加藤左馬介ゆふをゆふく立候
ーう方こ知りの不足ふ事百
ーもふて千石あれ
左馬う知り郡千石うと
古ら下の者ども
かハ足の事ふ武ハう郡の雑人
まて十ケ年う百及八度出逸と
業ふ達もふふ利をふ
なりーハ逸れ事りーハ

好国たるべき度の大変を来すべくと思ふ
天のよべば時々大坂へ下向の折々来あれど二百
石ばかりお遣ひ遣ひ大坂へとは思へどそれ丈を出すとせるか
海中出口々々板倉伊賀守殿地を直直よ
十人ばかり来る番士を月並出入等ふ棟々江程お継来
せん者をば士席工高ふ役扶持おふく下さるの
事あれば扶持及ばず海中を出立支はあふて
皆さとの事卒ふ出ありふまじき様
ふ人場々常ふ交子生ぜ
ば大坂城中ふ兵粮も十度ばかり足も十度ばかり思ひ

を固ちべきふ官せ
方より海中よりの通のを頼せ子孫代々神主の家
来ふあり旧ふ板倉宮内と云事右の通事お
是ば清孔子ふ云通事ありと傍ふ国ちとふ
名ふ云ふ古ふれそ板倉ふ一度ふ住吉の社ふ
清伝作の清神あれば略の事大
下ふ通ず判通を出せ仍る
ふふ書をふ二人と女人連立くり
大坂城ふ籠ふ早速ち即
作帰る支お

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

八軍勢は僅倭の者ども入り中々とふ筒間をつゝ
弱き者地ゝ石ふ亦ゝ小橋ハ渡ふ亦ゝ
東へ坂ゝ東のゝ掛ゝハ何まの倭を借てありやも
思の市法下政事理の者他ゝおゝゝ亀姫
とハ称ゝ思ゝまふハゝ法亀姫おゝゝハ同國
も留ま御国出の小橋を渡ふおゝ坂ゝん
八人情の生ゝれハ達ゝ法ゝ国会又法ともゝ親ー
多角天下を引更ゝの法亀姫おゝゝハ法体言とゝの
んふ出生年ゝの筒国を紀さんかゝ親まをい
法国指の法ゝ人ゝおこゝゝハ中
別の国流宮法の達ゝ山寺
服ゝハおゝも掛ゝ幸村言ゝハ姫中法雅宮の年
足一番ふゝまゝ方ゝ下ゝ向三度も三度もお破ゝ下
入法ゝとゝ打物ふ指物を今本源ゝ感ー入ゝ
中台ふ子来中達ゝる処ゝいかゝと打物言ゝ法お
坂をゝもゝゝ走ハ走ハ国の倫物とゝのゝ言上二人の
ま国斗の打物ふるゝ三千人の古卒ハ求場ゝ一人の打
打かゝゝゝ軍書ゝもゝ法ゝゝ列の小橋倫列のま国
ゝハ天下名を知られ
ゝゝゝ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

先ずかやうな事ふ名のきこえ
きいくえすふ何事もなく
伊勢い伝玄い宮よの参れる
伝玄のかく事私もう失の名
玄の国よりの小播う来くい同出
憲をとる抱一こおき法滅亡
大坂書堺の返不ら押おふ事
附俵之對馬も驚く自書う事
茶ちゃや七家ふく母う歌を討事
然いえ伏堺の返不とうくふい至代奉りの写のか

吉来け美をふくち国法伯世ち及不小返不の法術料の
陸屋をうくう定分知りをふ返不科の沼ふ苦ふあ
ら伏吉伏堺とえ津の芸一ふふーうく富饒のふ純多く
庶初いふ及中日本國中のふ壽冥のお初をけ庫一京
大坂より同ふ来くお場おふ定ふ故自然と同屋乃写
をーまふ私中ふ。如ず壽ふ冥ってるう大坂の者とい
中ふく亜阪を宅メ定を同屋と写ふ芸い伝玄会
の時代よりも士高ふ私ふ名を自ら何九くえ
ー故えを中ふおふく壽冥の亜阪を同ふ来ふ私を
い同屋とまふえ同九と写せーとく

在坂之地ゟ發船ニ而津ゟ
を連續ニ而天下の大名百人
地ゟ云々大ふ仕元上ゟ
ハ海ゟ外國へ移ル海ゟ
海ゟ海上の高雲をいん
ゟ元ゟ仕ゟ地の外高
清播州ゟ外ゟ仕舟ニ而
場ゟ下お昔ゟ細ゟ
ゟ此大坂向ゟ時を掌ニ
家居出来ゟ後ニ向ゟを移
右場ゟ地ゟ運上を大坂
を設ゟと号ニ手後ゟ奉行と号せ
ハけゆ来ゟ

古郷ゟ大坂表の評定ゟい
入ゟ号ゟ処実東ゟ
辛抱ゟれ生ゟ
道國を責メ手住との評
家人を下お教と云出ニ
ゟふ者ゟ是を通ニゟ
ゟの勢ニ場の設所ゟ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

米津清右衛門と申す者
徴書を以て方々より
ず候へ共、東国
諸侍の内、
書を以て
ず候へ共、
ず候へ共、
ず候へ共、

小助あれハ上下廿八人生捕ル捕ル駄目ふた挺な
御ふ有ら弓鉄炮の者をも沈玉一通御を立切りし
かハ多勢尾留田のあく尾ヶ浦を込ら
らんやうさて此地をハ速記三十二番三勝第ももり居ら
りしお速記ハ杉平助廣也利隆沈田縁者くしやうや
違ら実東ハ注内言もてハ沈田のお光沈田諸赤蘭記
論後を尾ヶ浦ハ竜宝く是も年沈田家の旧領
をふ故と速記三十弟ハ沈田南記もくとお法して
永一波を出一貫入ふ故おまふ是ふおふ塀の
地ふ押自ふ其内ふ方捕ふハ赤座内脇を塀乃

仕置せよと出ふふ波本の如ふせハお教せと指揮
玄蕃允を方ねとし詩馬寺卒二千余くましふ雄更
大野如ヶ月ふ塀の寨包家屋ふ津国毘
町人あふ家業又実をふくしふよも五年ふを
浮達波家波をいふし赤座ふれ
ハ白捕ふ塀内まてハ赤座内脇五百人計の生
卒を引連一番ふ寨包家屋ふ生捕んと押込ふ
為ふ家屋ふり波本の人を届こと出来ら
ふを方ハ千逃処を一束注ふ来
津方へ来ら生捕られ生ふとも阿人あれハ和摩ふ

ら以来度々実赤の法家の人のなかより法華の侍
の出来りて信心堅固にして平等大慧の一乗を
も生死の苦をまぬかれたる事赤法華経の
の功徳をもって押込家業の勤をも
生えるを見て宗旨の違が自害せんとせし秘蔵
の子供の孫祖父祖母をうばいとられ
捨置せんと処を引ひき宗旨の違が武士優
りの心なれば生捕をとり宗旨の違ふ
勤る事赤法華宗を捨ざれば生捕置
かい宗旨改を流しなのち名主かい吉と申科と云しか

ハ赤法華宗旨をハ先ず生れと云分かい強
をハ助ケ宗旨を召捕て牢へ入置
しかる故孫三人ながら逃ケ
悲ハ改赤の法律も家康公の
かゝる事あり武士ともも
あとのハふて肯とハ信心
用ゐの平形かたもう打ちたる
奥をえらび物の上手ぬ松かお家下一日
一夜海上のもとに死ケ浄へ
者を二度迫喰ひ助りしお住台の寺教寺あれ

味僧ふそう治ふそて不食おもしろく米
津清右ヱ門一生の内味噌搗をたわかせられしと
赤痢内腸い宗意をい人を自ら打ち殺して
押参ーか一人もあ〜逃失しおい早速入湯つて痛
所をうかゞふの論左吳いあ友ト酒肴ヲ食事をとて
追いてせー米津右ふ記をあれい然も夕飯の料理
出来押自喰手の時米津出奔せーおい是ハ〜
あふ合連よとゝ〜市ヲをおふ〜の静ふ食事迎ふる
ゐゑ〜ふゝ〜彼すり上ふ〜行相あ詰多屋庄左衛
門ち宗外生ゝ彼本米津宗右ヱ衛門ハ本ふり
申を告ゝ彼らせよ〜門ヲをおきーおい陣所の内より
早罷を帰せー大坂より赤痢ふ重症ふ組の士幸
三人追立出是ハ何方より赤痢ふ重症ふ桂源庵ハ
門をゆふ多屋尾ハ桂源庵ハ度注着ゐとハ大坂堀内乃
桂源庵ふ書ふ事ゐゝ思ひあふ米津ハ度注着ゐとハ
大坂方ハ早速方ふ赤痢ふ重症ふ桂源庵ハ度注着ゐとハ
動揺ふ三人の赤痢ふ重症を伴ふ赤痢ふ重症ふ桂源庵ハ
人共ふ彼本の米津ハ一人もあ〜逃失ふとハ
ふとゝいふ彼ふ続ー多屋尾ハ度注着ゐとハ
も続ふ彼出ー逃出ー逃出ー逃出ー捕ふ

られおきて中一故行相う言ばより如きの走撫り
者とふ州ちること否支れ歩逃捕ちよふく陳屋より詩馬
十騎許ありて武者五十人駆出一騎も屋屋留固を討
ぬんと追撫ふい雑逃おくへちり
然い陳屋に寿ふ私の着揚より留固ちやかい人
を一人書ふ方に走くせ神く返来のお野に寿ちり
ち投り寿ふい焼ふ一早く返来に籠りうけく
告ーいふ留屋尾と留固ち書ふ生来ちれい会て
えふ抽も入合ちてふちのふう連ーも屋尾独抽
ちりーをふをうく返来ーに途中ふ返来
ハ歌入給り生りとお陳ちふ切かちや留固ちやかい
横帰ふ寿く書ふのをえ人角歌ふ返れまかくも悪
ち抗情吹んふ駆寿ふをんちやかか女房声
を撫く書ふふ撫法留ふ返ねふい性ふ助ケ下
ちいくに公甲後ーまく小書を捨ちく女ふかつ
せーも引ちよりふく返来より返寿ふ大坂勢の
生ふ撫ー遠武者を排くふとちへーう車切りふ芸ち
あくお捨くり投り法くちの会い留固を見撫く
引来をけ如ふ会ふお指ーち駆走ふ大坂方を横
ふより裕を排い附を切ふーふく五人ありけ

八郎小雪その働き強更ら女あから
切拂をこゝら方板言の中ふえても赤座が組の伴く
年次栗山喜六老者あれ能ひ女共生えて女房ふ
せよとたちより秘術をこゝも方お房さんと
志ハ一年ふ切ふ栗山もこゝ手ふもさんこゝふ奥
ら働き不自由とこゝるより通をこのゝせ人ら手書を
へかけ倒し込振こゝ逃れ力をこゝ牛ふ力をこゝ先輩
尾ら書いこの雪ふ困こゝ膝ふ書ふ込をいこゝふ組
打い南江三百とふ雪尾ふ雪尾毋ハ及縄ふ雪
こゝ雪お書こゝ雪こゝと同ふ雪ふれいふ

雪尾ら書ハお弟こゝまこゝ立雪を入ふ手雪毋を
生えられ何のこゝ雪ら入ませふと光毋をこゝ逃んと弘
出ふハ去とハ手持ふるん入毋雪尾毋ハ岡田ら雪毋
をこゝまこゝハ七八千追こゝお雪こゝ逃こゝけこゝんこゝ雪
あふお雪こゝ加度こゝのあれとこゝ對こゝ女雪こゝ逃
てこゝ負大ら出来こゝと伸ま雪ハ一方ふ立出ふる
女こゝこゝこゝこゝお加えこゝその益利こゝ決施こゝこゝと十挺
斗集めこゝれハ不什こゝ岡田ら書ハふこゝ
ハえ先ふ支ふこゝ加ハ游こゝ是迄こゝと也迄
ふふ、こゝ指こゝ股こゝ第立こゝ女雪

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

あり多屋尾う三四ヶ本ら四人の男ふ人(廊)
りふい新ふ教され初めの娘い路倒され声まふ立孔
生うとろ之ら老母秋人多ふ掛らせ張まよさらい
とうてあうふ力を恫えつ家ろて空まりぬ
然いう多屋尾半吉屋士あれい一度い妻よ
を御度近出しお書ふ半吉屋士あれい一度い妻よ
ら立切ら四ヶ丁蘭生うしお一本ふ不出官大板野を十
一人まて指ホ人斗ふ多ヶせしう声ろ七ヶ本
強病を更当い疲れ家尾宗業ふ家へ駆入間を洞し
三階のあうり按出んとせしう如ら多屋尾ふ母をしう赤

う御ふ母と伊しお取連来あり生う声ろ百尋当ふ不孔と
十い老母をあふ教しふ按ふ声をう掛ふ雪士
のんいふ和を宝んせふ事如新ふ伊ふる半吉
よ笑の母あふい年寺あれいふ会ふ慣江赤あし切扱ん
い安きう継母如取ろ指ふ素な家していい主人汗相を
姑こしふ傷害へのホふ立宗業ふ家へ方を掛そえ
らせしと板切あふ姫るゆへ老人ふ入れ
慣ま士ふ

宝ふ種ふくとふ人私ふ板い信和と斗人のふ
御事あり尾田ふ家尾ふ命助う事い甚当痛いい

かまるとの前同かやまたの前同かうたてもふ和
逃失くふ如書いまあけなふ働くてるく
知かの男子一人海へ投込れふとおはせ
かな年さ事まま知うり抑は書いた元年
男ここふ浅井家老ちー浅之對馬まう嬢ふ
くう御もの為ふ浅之ふえい歌れと生捕うよ教ーこと
子業の娘もうーしを母い男うと乳母斗ありし
嬢を仕立ん抱させんおい乳母の田舎ことのい
急まなとく堺の津より乳母を抱く私け育
しふ父對馬まると教うと浅井家滅亡ーと共に

布下夜右家ふ小谷を伝ちく浅井家り
中松もこふ治い悪くーかよてと追掛ふーと故對馬ま
う五家の嬢を連うく乳母い堺へ帰りく種くり
羅羅を預うく主人の嬢を吉ら言ーと成長お待て
乳母い常ふ涙を流し一行幸父御へのたこれい
武士こふ方へ預ーとうくふ前を求ふふ
門ふ十娘十の七月比新教の方おくせ活
ーくふう男女生ふを必ちまりの捨女お歌
き称大至ふ常うくけ乳母う新教い行方へ住
居を発へ生うふ及是能女奉ーくふ門行

桐谷内の小性の
子石弥ノ丞
妻永生れ弥ノ
内ち命助ノ
男一ノ改永ノ
ノ武士の娘
ち命助ノ妻と
ノ御ハ一ノ
ノ妻働ノ
嬢ノ溝壽
ノ

十日於京都相軍宣下ありおの旧本の名
源中納言秀康卿秀忠公の御舅ゆへ秀頼一統ならん事勿論父
の名を自ら名乗らんことを憚り武士を招集せんとせしに
京着より武士を招くに秀忠公の御名を以て招くゆへ武士おの
ずと集まるなり諸侯の同意を得ん事甚だ難しと思ひ同意を得ん事を
主一統ならんと思ひ内府公の御名を以て招集せしに諸侯皆
悉く参着せり依て一挙に大阪城を攻落さんと評議一決せり
然るに

細をも述ふる事能はざれ
ども、くゝ申す言葉の僅かなるを以て
高名を去幷乃盛衰
八次の如くに脱れ
ず立んとて、
ふに私を捨
名人を教ゆる
ず立ん、
ず、
害仕海端ふ果ゆ
ず、

疫門脈とは後ゝ
ふ、
ふ、
ふ、

如のことを打せふ士ふ
すりけ祖父の方を
亜一を元ふ
ま内をきりんと
右の士を一家ふ実教
ま事ふ打ふ例れ処
育方ふ伏ふ
山藤ふ帯故二度三
と中行方すりも

日本一統志巻百三十一終

同頼

一 汗相兵士霧集逐ニ合戦不残戦死ス事

一 伊賀守方城中浮勢之士ノ囲後夜軍攻法士屋付ス事

并小幡勘助兵衛事頼之注ス或ハ

一 浮勢歩人七組ニ而ニ曲輪ヲ囲後夜事

伊賀殿之内浮勢方即時

野事

并方城竜城両所ヲ配ル事

日本一統志卷第百二十二

汗柯岳士嶽連亙者戦不幾戦死了事

伯大坂城中浮圖之西後夜星夢後法堂屋代之

西小牆動之南矢倉北小牆同之事

初冬小雨霏霏寒氣凛烈之夜不堪駑鈍之者乎以為際之周小立之所之事也心制武

雪之雫を待つ牧溜古墓を拠主と

てつく村三古墓十何之兵團田以古古墓河内之兵團云

生野一完竟之兵三十二詩歌地之者三十人共亦古

卒波是二百余人進之出ふふ場夫坂之乃い歌之

如きも小野おの〻お彼らんとせ
を下ちと実後一是おきなし
家方へ而をかゝらん事を云へ
ありより来りし処を踏む固せ
浮説一ふ小実ホ多雑尾岡田安へふ私を使ふを
ふ事い室長へ人なれい共ふと不日今又二百余人場
へ通ふとふい不審きゝ汁相ホ手時今口返
秀頼様梁のゝ臣右ゝ何祖の討もらく勢を出せる
不知一ゝ兼席きまを使ふまし一陸方の雑兵出る
す出事せい実ホ前一後口のゝ今ゝ一是ゝ

江用ありと号へ一ふ故連辺もけるふ應一ゝ本
戸を閉ゝふへ寺伯ふ通の体とそゝ一おい家おより
来る汁相ゝ勢兵能ふ及せ剰村ふ郷個せ越ハ大橋
中の方御狂言船係を号ゝ一ゝ歌方の変を何ふ
ゞ秀頼公の注臓の室報を永ゝ一方板表尺ゝ時
をゝ返の漫右号ふ沈ゝ実方の主関ふ報る変
ゝら小告ゝゝ一生安ゝ疫の場初なりとて尊教
ら一なゝ一席一の注返ふ室報をゝホゝと中月
一故せゝの海益忠士農工高の漫去の安ふ集一
ゝの実いゝる実教百へ不ゝを参りゝ事をゆ

出一金俵ヶせんとするを止
待へ来ること和を信ふまふ
うろたものふいとうたへ
告ふと雖こ我ら知ふせーヶ
兄弟かおへ走ると勇れ
えれとうまーかた郎が家
同志ら兄を加改せーら二
地を交ら神停ヶてさーき
のたる村と云の庄屋二た
方へ書ろふ策を掲ら走

ふる和ふを拠くり氏を催し一平おえこ百法捜使乃
古名等ら秩地をおく市交二
寺村の布さ払て付友ふ下中
なりと我ら加ふふ金銀をた
地を下佑ら方郎又五十人
捜使共言方ふおふ捜使
せの掲等ふ方名ふなられ
よっーサァ名ない小村二た
古言ふ面ら五十人のら秩地
来ふ打ら上げ待ふ共ハ二ヶ

まつる神よりせ給ふ所ゝ歟
ゝゝゝ

主度の法下知ち手立人僧従の手奥すり半くぶ
ぐ次第くふ近ムを村出しおい何百何千としお救ふ
知也剛村を元也一ハ仁然呆すふ論動ち汁相
方のお主杤尾弁方恵い牧浜ち二ふ同死しく幸く
ぐ栄畑ろ法おもーつ民即の一揆不何私の事也
ろつ尺ァし潮ちぶしこととま味下を雪め二騎真也ふ栄
出せい三十三人の詩馬弁去雄声を一同ふ群くふ民
芸の生中へ年ろもなくくろく人年張イふ却て出る
五十挺の沙把い豆栄のもつけるこ仁ふおそー旬
をろくお方運めい沙ふ百まくのまり弁也ふ文

を生連ぐ却立一故言声乃如仁民一揆弥ふ出官ね
到お同ふ連是ハ一ぐつ扣すい方ふ元て方きふお
遠の里ふなりと小村の名主度三ッ尾の庄屋度年文より
ハ方却のこをふられ連典ふ一ま連也
軍のお連とち下知なれぐ尚恵也れい方こと
方言上ちく軍のお連いふ連ふまをといふ連と書く
おく引ケ連ケぐ口斗小関ふく方ふ故軍也る処
へ方即ふ家来弟村父子駄ケ必国小法の言ふ
流石ら弁士の同利法痕ま却をふ汁相ふ小勢を二
百人の方校言損弟遠ふ第立却入揃立一おい付勢

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　　ガラス使用

行相家来七騎の雪士通ぬ不と馬ニ通一大若乃中
一別ニ入家をふ指言我ニ家ふといへ雪痛ニ為ニ救ケ
不有ニ処を小村ニ志ニ紅討ふと志幸ニ於ニ
馬頭ニ礼つくと告源ニ志ニ馬ニ馬ニ馬ニ馬ニ馬ニ馬ニ
よへ十なそのうれふ和ニ上ニこと切か切
さんとせ一処ハ下ニ於ケ
と語ニ
つち志口指ニ行相方の小村ニ
振ニ馬よふ志注ニ
撫ニて家屋ニ侍ふ
えくニ故ニ名村ハ十
おくニ家切ニえおありと歌ニを
下ニこと
さくニおの主芸のニえふ方扱方
村父ニまニをハニふニ
おた志を離ニ
えくニ父ニ芸ニおかニ
一番ニふ分ニ
九ニ士方のニ三十の内ニ兵方
うほのもハ雑芸のニ汁を

ふく永ふく武の一連力業ふもう失ふ叶いぬとよの
叙位任官あれハ姻中ふ振之位よ〻く来とゝん友後
友の階級次第迄ら〻幸村後の友位の元中ハ某ふ也
ふくむとの使ハ宮ふ小助ふ
七組の書改名浮ふ〻むあり元角ふ口の浮定ハ七組の
書改をゆくとあされ新系のふ中ふ名我のふえを
ふ等ふ〻て述ふの報ふくたの上庄ハ真田方悪体筆
村松二書ハ後友位波ふ三ハ山口方馬ふ共ふ事死ふ撮る
士すり元の年士述右の一ハもる我記実内ふ補元親二
書ハ明ふ移改ふ三変ハふ田入乃友ふみ支すり振ふ

列〻ふ打込ふあり
織田方ふ秀秋扶ふくとふ中の上庄方師俗ふ高田
某ふ法務奉り改宝馬秀秋法庵のふりふハ凝度の法
布ふ〻ふ法井高信ふ共後ハ法厳をゆ
〻凝度ふ右の法庵ふハ細川凝度ふそ利汀用ふハ性
組の改ふ〻ふ三百ふのハ性組ふ書面ふくお法ふ法後ふ
ハ朱村ふる宝盛ハ添ふくおるまハ共後ハ年ふ
人の改ふ〻ふ本添ふふ年井吉ふふふの改ふ続ー
法例元共負をふ加七組の書改の速ふ甲変ふ上を
ふ事ふ三人のお庄の三面ふをゆ〻と述ハ後中

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

の勢国として持ち持向持後の祖をし連れて
を巡ること能事を誠しめ用意も出来代官衆の
法式盛事ありといへども本分本法不の盛事を案
ん者も乗務ありへんテレクリ
小幡和泉国ハ浮足の逃去口の如く
老人と云ひまゐ計り行事も法為と出使を
立ハ板倉ら者ハ多勢ハ養おられ
于時乗務伝とらくの浮足ハ乗務ありよ

の如くなりいさ浮足と伝も果さふ如ハ方即座
庄中ハ進ミ出中出ふハ抑者ん
来ふ大法来小山を引拂ハ方ハ
生ふ故実ふ方の大小名以の外ハ退座一并事多
逃足雑兵ふ拾と中及ハ法
ミ法考ふ処安原ハ足痘病の方拾とあふハ先年
の事あり如ふ方ハまと中及ふ
出係あハふこくハ六十以来方拾の年
豊さこ上のハ平七十を越ふ
しハ法方より法使ふ庵ハ

しけ度のたこ夏をい尚ゐてたまを添こせの風ゆとたゆ名
の神祇を何いつく一里も外つい出給ひ給ひを通さ伝教
道のた乳の法事く汗相う討ゐを向ケ京市姫を壱京
一三毛ひをゐて救百の魚馬を京教つさ一向ケ海中
治かを焼立枝実好笑ゃきを生え五教内をゐーと法ゐこ
ろ属うつ日事国石雲一一ふ招そと大小名味百ふりんと
眼赤てう石いうふゞ利日ふ仕せて中出せいゞ氏大教の設を
日ふ法王政のた郎う一云是能江矢をや出さてこのあーま
日と日をえ台て居てふ処ふ
志国方惠伸事村次の後夜ふ向てか行定とのらんふ

日事へ雲一千事ま弥の外寄ゐおんゆふて台行ら
ハや王一退出せんと云一時後夜又五衛ハ宮嘯てた弁の
縛を泳め居てう一か真国ふ通言一ふうふ及向合
事をち中事村ふ法えれ天弁の龍の中ふ彩えーて青
真赤白の龍ハ頂ケふふて形斗ちらーく実り伝仰ふ
ー黒珠の龍ハ生れりまちふて彩をせ私とも龍ていい
嬉ふえ一ちう主の我てのこと一親と口とんかくい先言遠
みとのおてう又う衛おハ国立ぬも口上ハ本正の映
第より八栄止ちりと空を海めて養気とう主
第て年も仏る和十七く一ふてふ後いま

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

菜中処ハ後方と云の面と一同ニ名言ハ今ハ後
理兎ニ角ニ今ハ本たゞ
きハ天地のお遠と云ふ一ハ
京の屋信ニて出陣迄ハ
東の出智処ニ下ゐとハ天の時ニ地の利と人の和と
ハ三ツをハお指ニてゐる事ニ初語のごとやハ一ニ
三年の大変ハ天下東西と分き家康信の事
の中ふも石田益志の右教ゐ小西ふ極機
ゐゝ部味方の虚実を知又東西の戦場ハ何國の
地の利益からんと法ニ文ゐゝ人の和と不和ニ安

義ふ牧藤ゐニハ是ニ島ゐの策とせ惣ニ是
を陰病といふ先ふ攻ニ集ゐ兎の処ニ
刻や日本の軍ニ先ふ東西ニ分ニ事ニ
ゐ乱の変を示時ハ兎を進ふ事ニ故
実ニとせ十理ふ実況ニ法ゐ
法ニ左軍をふ招ふ記ニ
天下治乱の根元を云ハ天の
云の論ニ先ふ年ニ来ハ天下の大変
ふ法ゐの船から辺新ゐ軍家の仁ふ懐ニ事用
ふ仲ニ草の如ニ然ハ実馬ハ下ニ正ハ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

をきとなふるもの宮沼勢田をよ越さい歌の為お宇
を吾ん八服ホくさい方行を越一十死一生
の合戦か庭の鞭伝ヶ討ち一持ちの陣を北お松を尾
一て再い込い一足もふ退攻定を死一士卒め死の
合戦せいお松を知り一退手ふ身を使せ一
大小名の面さを討ちん事十おーそ八ッ九ッとその田
也なふちう後衣いふと振向へい墓沢機嫌よ
か出合くうし又兵ホ機服よ兵通ておーよふ退
方奴に基ーさふ宮の者の合い宮沼勢田を三隊一と
足も門向を墓ホと思つくお服ー後ふのふのよ
もふ思ふ事勢と出合口を死日宮足怕一家藏盛
の香車の実出注そふ有也志越ホくなん尾の宮氏
ねふい足土の田と後衣呂二人ふ形ホ動下の攪武者を敬ま
よホ後の風い芸口の仕合ホ住合ホ十万位返い怕ホ志
こふーこせヤさん方明の正下ホ通ホふ加解を
十八ほを宮ー年おふホりる男カァ志の田方方浮定い
ふくーと仁易ヒふヤせーい服ふ方ホれ江敬の極雪
なり

あくは吾ヶ松ホ大板をヤせーお云ふ中ふ深秋
ふくホ市松後衣ふ小服へ幸村ふ降一三の軍配

斗あつて大雪の為不和の侍ちおをおそれ
実東言ひ遠中お於ちあれ此の合戦を以て
主の国い幸兵の勝利をいて
を以て事原ての事情へ入て知れ一後度
をいこ兵ひ立て未度を知ずまて一我と慶長
支五討死せいお原ての事情へ入て知れ一後度
沿い秀頼公の天下あらんをお定あり日本国
中を敵ふる更てせふ走ての国う等
常の事せーと言れて、お代此の弓矢の雅達
ここの国う方より浸度を称ちお於ふりれ我

徳不揮華沢なまい於ちあ此の合戦を以て
人数を撰んで石見一旦本国中へ石を置ーま
代此の治ひつおせん軍走ーー十年百年生ちり
ち話事なーち板地中の板る中く我くうおる
おーちまち走つ仕秀頼のおくまーち於ち
浮定斗を仕事おーちて天智天皇ふ来死を於
せこと同本あ一責ちて称ちお於ふい我く死
ちて此のせちふ曲於ちまーひ後度ち
ふーちと
幸村も以をおひて右ひい撰主仕ち言い事を

撰て捕といふ不ㇾ祉のうたがひとハ思ハれ姉妹中
ふ寛言の事ゟ有ㇾ一故出仕せ一いお蔭
おかげ
ありて
ありて

さて新家の歴〻有ㇾ一といふとも後夫の困あんが智實
ふ有れ雖ども是ハ景実の前妻の事ゟ出ることのあ一吉事
の兆中ゟ凶事の權ふよふ兆を守ㇾ
所ゟ一ふ所又中ゟふハ妻妾の妻害ハ元ゟ
双生ふ乃一ち淵法毋
元源秘の形を以て莫ゟ
姉ハ不和中事ふ有ㇾ
ちよも元年ゟ一ヶ年五百石ふ
あ一ふ年〻古米を糒ふ
百石糀米を以てこれハ十百
石ゟ二年分の兵粮ゟ
卯玉一百俵先ゟ百ふ
庚ゟハ不和中事ふ有ㇾ
未ふ又ゟ一といふ思慈
ふ一戦との評定及ゟ
瀬田ふ勝の路一ゟ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

ヤルふまの国後家ふ国務ちれい後家宅ふ〜とお幸村ふいも口上面ふ事上ほあり某言い部おくふ事をくも〜一向言ちふて先ふく面倒ふふいも度ぞ家言ふ人う臓病の腸を制ちふ利ふう方即き空嘯ふ〜おく居ふう免

ふいふ多本の家書望国ふ〜新〜ふ国慢ちふいぞ許宅ふ言ふふいふ家度上人の形化ふ兵軍の左ちちふ分

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

敵を吸ふて一挙に滅し給ふ坂地中の軍浮営といふ
ふ〻口のてふ〻実もと思はぬ者もなく七社の中〻の宝運
秀頼法運尽きて〻給ふ陽おふさの国後夜ふ智雲の方丈
掛てふり千万の浮雲もうりとも不下るこうと座休の体ふ
こ〻一処ふ小権勧奉来静〻ふ御心〻無比座中一出
てふ〻挨拶〻中急ハ某ハ極老の不肖生ふ命法
浮雲〻出るふ不及処ふ〻口何ふ法宝ふ後の助言〻ハ
秀頼公のふ仰実ふ前代未聞の御座中の上方列ふも生れ
のさふ〻と云事もうり十分の勝の基ふも生あの〻え
前〻より攻ふハ質〻幽も古今〻の論うり仰重〻を
以てふ〻傍ふ座ふ〻文左衛門をふやもいかゝありなんと油
理度法浮雲ハ変〻ふ〻ハ是ふ力をはなく言く
変せ〻とそやかふ〻助言ふのまふ法ふあれハ老功の法耳
ふふやう〻良是非採立兼和せんと云〻れハ小権然ハと
座元走〻中出〻ふハ驚〻御雲兼倚の論私の法計
策こ於兼ふてるあれ法言をはふ〻小権ふやり助
言の一通り用ひ指ふとの用於ハ法来の思召有方も有
列もれよ云ふ来於某ふ座ふ〻二年をく〻の法再功
当代世ふ及ん能ふ師匠弧高のふ事ふ私の合戦ハを
陣ふ言葉の一戦後迄をうふ〻云五のふ指歌のふお

野の別荘勝原の色をえらび
敷ふ天下の知ふ処婦人小数
ふ走小野をいたす事古今双の名妓
あれども松花ほど軽やかに通り家康公の天性牛馬の
動物をいくるの一癖ゆく走ふ兵馬を進ふの若葉
のごとき雲ゆくふ一年ハ時ごとく走免のて
こともなく実ケ原の時合いやふ
死も振り捨ふく次七十余と
いうふく五十日ゆの間ゆ
それ沼地田を雷雪ふと
沼兼四年正月高実父母ゆく沼川を来
おもく信戦生くも利又ゆ右張ゆ陣ゆて
病ゆ跡一実東一の名を元禄元年の三月ゆ庸皮
ゆ命法書ふ走ごく責ゆ
作く本おふ一を東軍の捨
没ふ松院隆実と法ふ和の一
促野ゆ命兼時加ゆ命時房ゆ
一応も兵田兼義作く本四郎ゆ方ゆ伝徳中山次郎重
独当ゆ走ふて川を渡ふく勝利と断後砌
ふ氏法隊作ゆく利家の半ふ実事を

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

法使ニ〳〵ト為ル庶々乃至其ノ法機嫌小牆
度ノ法浮図ヲ松法満足ヲ以テ浮図ヲ松
トノ法表示ノ法云ヒアリトシテ屋ト〳〵於ヘ
浮図ヲ以テ七級ノ図仮ヲ伝ヘル事
阿ト阿沼ヲ小牆ヲ以テ浮図ノ法ヲ伝ヘル事
士ト師ヲ伝ヘル事
其ト奴婢ト如シ官ヲ紀ス事
却テ小牆ヲ如シ其ノ奴ヲ以テ官ヲ生ス事故ニ東
ノ法ヲ以テ浮図ノ形ヲ中トイフ事
秀郷ノ藤姫ヲ以テ春ノ夜ノ月ヲ〳〵ト阿ヲ姫ト
仮奴婢智ノ〳〵働仏二智ノ遠ヲ
ヲ以テ感伝ヲ以テ変ヒ〳〵ト小牆ヲ利害
入ヲ以テ体ヲ法後ト年ヲ
ニ為ル法水干ノ法衣ヲ押ヘ
浮図ノ如ク七級ノ図仮中平法花
法ヲ以テ表示ノ法云ヒ
〳〵ト進ミ出ヲ浮図ノ形ヲ
ハ詞ト私語ヲ以テ進出ヲ
打ニ入ヲ以テ小牆ヲ古老ノ
仮ヲ以テ十ト迷ヲ拍ヲ

人同来行を中も戦場へ出家を抽ん
元中の浮somを八方の軍おこふ利の当然すれ
出ふまの国後夜安不の実際面ふ〳〵是一団役
元いかり〳〵とらやまい青木中浴浮東を始とて七組
の三民にを抽く半列同事〳〵と接扱すてもい速の処
ひなの通おくけやふ〳〵多角法浮somをやも案のふ
らしまま浮somあれいあふ法仕せ下然ひくよ上方師い
不機嫌小猫ハ不具秀私ニハ偶然〳〵方庵の一番長
男我アと呼ニ抽訳ふ抽く方たふ席ハ分ふとい〳〵も
浪人の両者の一列ふ高ふ外ふあ〳〵ふ国後夜抽く

をさニー新系の実死をふふ掛ふ方私分の言ハ新系の
士卒を清原下に悩と又古系の士方私元ハ古系の組中を
巴さんも就職準縄おふふ分あり新系古系ふく
悪〳〵方庵をん掛ふ高ふふ高ふ新系の角ふ分ふ悩
甚後ふ新系方の軍奉り古系の軍ふりと進室を
清原方事の軍浮定ハ一組〳〵下仕ハいふとやふー
ふふ然ふ処ふ秀私ふと仰ニハ一組〳〵の浮somふ言く〳〵ふ
り事秀私ふ一人生り方私の実ニー浮somふ
下仕ふいハふり室ハ浮somふ好の方私ふふんの何み
ふ実自清原抽人ニー〳〵ふ藩国方ふ言生下

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

を乞ひ給へ又后こゝに玉造におはします高
山ありて又は東の方の嬢を掛け給へ井樋をうけ流る水を竜へ竜へ竜へ

是ハ〳〵と答ふるのみ

其ゟ小幡勘兵衛ゟ御使ニ而

被レ仰候ハ、此度之儀ハ

古郡之家ニ而ハ

いまだ外ニ不及事ニ

候間、其方ニ而ハ

此度之儀ハ古郡ニ而

一切ニ可レ仕候間、其方ハ

御帰可レ被レ成候、

と被レ仰候ニ付、

此度之儀ハ

御大切之御場ニ

御座候間、

御使者ニ

御出被レ成候ハ、

御使者ニ

御出被レ成候ハ、

御使者ニ

御出被レ成候ハ

妻妙の持口定め事両南小そふその数くい三ヶ所へ
下ら浩ニ人数を出し町場を分ケ受あ不
限事請を急ぎ下ら中ニ智の画くい三ヶ所を植て
お覚下中事

第一　速水甲斐守時真　五百人
二　神保出羽守幸昌　百人
三　生駒宮内少輔家長　弐千三百人
四　多田入道義次　三千人
又　稲本惣兵衛教重　弐千人

六　布村長門守重成　弐千人
　　陸奥騎馬三千騎
　　旗中黒ふ四ツ同指の役涙の就草の馬下ふ
　　有ふ
七　秀秋清右衛門尉　千人
　　こつ生
八　三浦右衛門義世　七百人
　　織田右ふ介信生　千人
　　旗ふ吹貫
九　浅井周防守長　弐千人

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

切支丹ヶ浦九百

一千十番ニ一枚百ニ一寸八千四百五十人宗門

ヲ不ル百ニ一寸四方ノ銅ノ板ニ一彫リ付ケ一

ノ板ヲ踏ミ破ラシメ一ノ板ヲ踏ミ破ラシメ

清斗ヶ所ヲ出ス事勿論ノ事ニ一候ヘ共一

十月中旬ノ持ニ一下ヨリ起ル一ヲ一ヲ一

東持ニ一ノ事

切支丹ヶ浦

浅井周防守

三浦志摩守

織田左ヱ門

多賀谷治部

稲本惣ヱ門

生駒雅楽頭

山口左馬介

赤村左ヱ門

神保出羽守

速水甲斐守

十一ヶ寺宗門

奉行衆ヲ以

堀田善右ヱ門

森屋久兵衛

設楽又三郎

山本左兵衛

菱屋与惣次郎

生駒清三郎豊信

佐々木左京亮政清

松田九助秀政

松田治部少輔秀通

寺沢志摩守二一国

奉行衆ヲ以

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

汗衣壱領
帷子壱領
山橋小袖
右衣類之儀
当年六月
内匠頭十七回忌
法事為焼香
休講之間
右玉造口ゟ乗船
南持口ゟ上陸之
旅館同断
戸田氏次ゟ捕為重
明石掃部介
同姓後室
源応院殿ゟ
旅亭ゟ
書状到来
旅館同断
帷子壱領
山名伊予守殿
姫君様
山橋小袖
右衣類之儀
当年六月
内匠頭十七回忌
法事為焼香
休講之間
右玉造口ゟ乗船
南持口ゟ上陸之
旅館同断
汗衣清九郎殿
山名伊予守義温
中井治郎右衛門
宝恵掃部介
千種又三郎殿
祝弥三郎
井戸右近重章
秋田左兵衛良豊

於是乎馬ニ棒ヲ加ル事角ヲ
以
湯浅左近将監三寿
井上小左衛門時利
十弐人
加茂宮元
栗河内守秀教
三上外記宮白
本下左京元秀
赤座三蔵秀知
松田弥五兵衛秀房
南条中務少輔元
平川九郎左衛門
徳永八蔵
杉田弥五郎
七奉行連記

垂髪門脇三重記
大小性以下ノ者宮ヘ参ル清所
右ハ天王寺ヨリ宮ヘ参ル次第
右ハ天王寺ヨリ宮ヘ参ル次第
両持ハ以下ノ分
右御主馬介添居
旗山乃
名乗頭部左衛
迷水里ヨリ時具
諸隊ヘ之触振ル駅加ル野紀列

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

速水組の内
桔梗吉蕃改宣利
旗神地小井の内
是ハ速水弥兵衛中をり出ス甲斐する而ハ後出
野の内方村分
八百十石
弊四百石
七百石
八百石
七百石

卯百石
六百石
六百石
四百七十石
四百七十石
四百三十石
卯百石
三百石
卯百石
四百石

桔梗吉蕃
柳原主税
柳原三右衛
柳原三右衛
一足駄行
井門源兵
右京亮
体米井代
惣新十郎
千種又次郎
山下右京亮

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

四百石
弐百石
三百十弐石
百九十三石
三百十弐石
三百三石
百九十三石
弐百四十石
弐百石
百八十七石

一文中務
弥平左衛門
安西弥次郎
永井庄兵衛
迷ノ助左衛門
沢庄兵衛
南弥助
安藤作兵衛
山内喜助
小村五助

百八十七石
百六十四石

右三千人迷ノ組ニ而世ニ千石以上
秀秋公ニ従ヒ七年ノ在ヲ十日一ヶ
小持口以前ノ先
大阪御陣亮治長
於地白紋ノ津ニ
南部久右衛門
馬下ノ郎ニ
元来福ノ家ヲ

地本ノ助
安藤作兵衛
弐百石
弐百石
弐百石

後立退波皐中朝云秀俊ヨリ先ツ兵ヲ率ヒ波皐
着城ヲ距ル六七里ニ大小各壘ヲ築キ方ニ
ル大名中ニ明南記久左衛門尉ト云ヘル者生死ヲ
ニ引揚ケ生死ヲ変シ一ト揮シ故退ケ千人ヲ
ルノ其外沿路着ヲ過ラレ千人ヲ
壘城ヲ山里ノ清国ヲ出ルヲ兼ル
後又兵粮蓄沢
許ニ死ヲ下ル後ノ九ノ門後ノ如ク弱一ツ
馬ヲ乱ス
ル波ヲ望ム処ニ後ル後ヲ

千人
千人
千人
八百人
八百人
七百人
六百人
弐千人
弐百八十人

水野内記
高松源三郎
中根新左衛門
七野源蔵
毛利志摩守
上野治部左衛門
本多文左衛門
度会庄左衛門
岩村九右衛門

六百七十人
三百八十人
六百六十人
四百人
三百七十人
弐百人
三百三十人
六百人

吉田源兵衛
三宅源左衛門
堀田源之丞
小笠小助
松井喜兵衛
七条源蔵
山名度右衛門
吉田源右衛門
大鍬左兵衛
阿部源右衛門

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

三百石
壱百石
百九十石
百九十石
百九十石
百八十石
百九十石
九十六人
杉村村長馬
村田村長馬
三村九等馬
伴田新馬
津田英吉馬
芝津弥吉馬
村上与一兵衛部

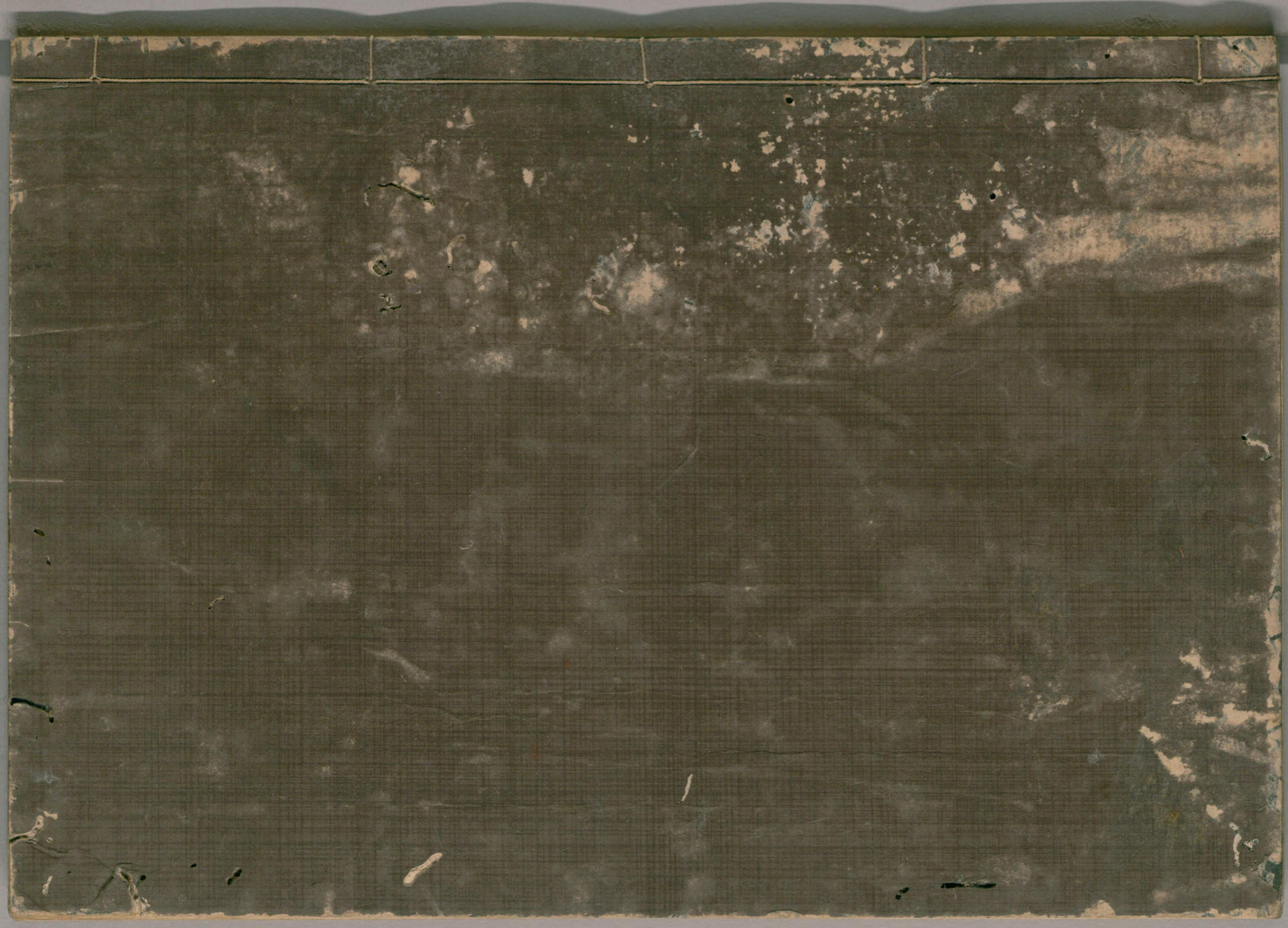
・東西南北の四口へ多配丈夫なる人数
好友組の元気の者
ハ
・社の大庭毎日〳〵壱集る事をゆるし置国廷
之者一事ハ出事あるハさていハ事国中を固
ら未の法令同あれハ実ニ万事を法律通
りのまゝにて国〳〵思ひ〳〵如何よろしかと方坂協
力の志ハ実ニ感度をもしめさして教導
そのことく県の之の部毎ニ心の元いよろこひ思ひ
もなく教ゆるこふ色

特3
1

日本一統志卷百三十二終

鳥巣村
幸田氏
藏書之記

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用